

図書館通信

第 3 号
R04.10.24
美和高校
図書部

読書の秋！ 秋の夜長に読書してみませんか？

企画展「宙を見上げて！」



中間テストも終わり、気がつけば 10 月なかばになり本格的に秋！という感じになって参りました。空気も澄んできて、透き通るような青空を見上げるとすがすがしい気持ちになる季節となりました。

こんなときだからこそ、夜空を見上げてみませんか？秋から冬にかけては星空がとてもキレイです。夜空を見ながら果てしない宇宙を想像するだけでも心が解放され、今の悩み事がちっぽけなものに見えてくるのではないのでしょうか。

図書館に入ってすぐの窓側に展示してあります。資料などは、ぜひ手にとってじっくり見てみてくださいね。

文化祭での図書館

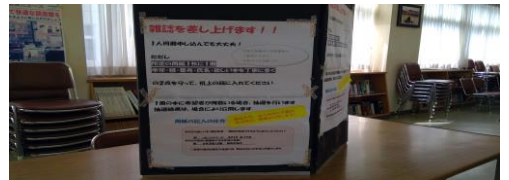
文化祭の時、図書館に来てくれましたか？

図書館では「雑誌バックナンバー譲渡会」を行いました。本校の雑誌譲渡のリユース活動は、平成27年から実施されている企画です。

34名の応募があり、104冊が配布されました。



『オレンジ・ページ』が大人気で、『ダ・ヴィンチ』『Number』と続いています。大人の雑誌『サライ』も渋好みの美和高生が応募していました。来年は、是非あなたも応募してみてください。



☆全国読書週間「お楽しみ抽選会」 10月27日～11月9日！

今年もこの期間中に図書（漫画は除く）を1冊以上借りた生徒に「抽選券」を渡します。

*展示してある景品を第1希望から第3希望の3つを選んで番号を記入してください。

*一人につき1回の抽選チャンスですので、重複した応募は無効になります。

*期間後抽選→当選した景品をプレゼントします。厳選なる抽選の結果は景品の発送をもってかえさせていただきます。



読書感想文コンクール結果

今年も1・2年生の皆さんに読書感想文に取り組んでもらいました。普段、本と縁遠い人も、自分自身で一冊を手に取りページを開くという「本との出会い」の瞬間を経験できたと思います。ステキな本と出会えましたか。

最優秀賞作品は「第68回青少年読書感想文全国コンクール」に応募しました。裏面に全文を掲載しましたので、読んでみてください。

最優秀	2-4	「マララ教育のために立ち上がり、世界を変えた少女」を読んで
優秀	2-2	「ぼくが見た太平洋戦争」を読んで
	1-2	「ライオンのおやつ」を読んで

読書のツボ

とっつき
やすい本から
読んでみる

人々の生き方をたどり思考
する

ちょっと背伸びをして本を
選ぶ

疑問について答えを探る

偶然の出会いに
期待する



読書感想文最優秀作品

「マララ教育のために立ち上がり、世界を変えた少女」

マララさんはタリバンという組織によって頭を撃たれた。私の記憶だと頭を打ち抜かれた歴史上の人物、たとえばアメリカのケネディー大統領などは銃撃が原因で亡くなっているが、マララさんはまだ生きている。医療の進歩によるものか、撃った人の手元が狂っていたのか、それともマララさんの強運というか、運命のようなものか、いずれにせよとても幸運だと思った。ほとんどフィクションみたいだなと思った。

マララさんが撃たれるとき言い放ったといわれる言葉も、私の胸を打った。ピストルを持った男がマララさんとその仲間に近づき、「どの子がマララだ？」と尋ねた。「どの子がマララかって、マララは私」と答えた。

私はこれを読んで胸が熱くなった。マララさんはどうして、そのように堂々と命を狙われるのだろうか。私自身が15歳くらいの時は、どう考えても命を狙われる筋合いはなかった。「一人の子ども、1人の教師、一冊の本そして一本のペンが、世界を変えるのです。」これはマララさんがいつかのスピーチで語ったといわれる言葉だ。彼女は教育の大切さを説いている。ここ日本では想い浮かばなかったと思うが、私の出身地であるパキスタンにはマララの故郷のようで、特にマララが住んでいた部族地域は教育環境が整っていない。少なくとも日本ほどではないと思う。私たちは平和な日本に住んでいるので、この本に書かれていることを具体的に感じられる人は少ないと思う。

宗教的なタブーも、ピストルも、差別も、教育の不備も、ほとんど意識することなく生きていくことができる。それは決して悪いことではなく、とても幸運なことだと思う。そしてパキスタンの状況を知ったからといってみんなが必ず行動を起こす必要もないと思う。行動を起こす前に、私たちは現在の日本社会について教えることが重要だと私は思う。日本にマララさんのような少女が存在しないのは、なぜなのか？日本がパキスタンのような社会ではないのは、なぜか？

それらを考えないで「マララさんの力になりたい。」と考えることは順序を間違えておりむしろ失礼であると思う。誰かを助けたかったらまず自分についてよく知るべきだ。自分が泳げるかどうかわからないのに、溺れている人を助けに行くのは愚かである。

それらについて知ることは、つまり学ぶことは、マララさんの主張する「教育の大切さ」を尊重することにもつながる。そしてそれは、彼女を恐れたタリバンが真に恐れたもの

だ。このタリバンの妨害によって、学校に行くことが、ただ勉強に時間を費やしているというだけではなく、未来を作るためにあるのだということに気づいた。その未来とは、自分の未来だけではなく、自分が暮らしている地域の未来、国の未来、世界の未来でもある、とマララは確信したに違いない。なぜなら、このときから彼女はタリバンの迫害を恐れず、子どもたちの教育を受ける権利をまもるために、その大切さをメディアを通じて国内外に発信するなど自分のできるかぎりのことをするようになったからである。マララは自分のあげる言葉にどれほどの力があるか気づくようになったが、その言葉の力を彼女は「世界を変えるための戦いの武器」と言っている。ゴミの山で働く子どもたちとの出会いや、タリバンによる学校の破壊や女子教育の妨害によって、変えなければならない世界があることや、最も大切なものは何かをマララは知った。彼女の芯にあるものは、「教育こそが世界の未来を作る。だからすべての子供たちが教育を受けられるように、世界を変えなければならない。その戦いのために自分の力を全て捧げる。」という信念なのだとは私は思った。マララが国連本部で行ったスピーチの全文を読み、私は涙が止まらなくなった。彼女の言葉は私にこう迫ってきた。「戦争や貧困、無知、病気によって苦しむ大勢の人達がいる世界があることを忘れないで。自分のなかにある無限の可能性を信じ、知識をいう武器を持ち、強くなってください。そしてこのような世界を変えるために共に闘いましょう。」今与えられている恵まれた教育の機会を最大限に生かして知識という武器を身に着けて行きたい。マララがゴミの山であった子どもたちや友人に語った言葉が今後の私の支えとなるだろう。「私がひとりかふたり助けて、他の人が別のひとりかふたり助ける。そうやってみんなが力を合わせれば子どもたちみんなを助けてあげられる。

